死後の約束

晴香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死後の約束

【Ｎコード】
Ｎ９２２７Ｓ

【作者名】
晴香

【あらすじ】
魂は忘れない。だから、待っててくれ――。それは、少年と交わした数十年も前の約束。

※『鏡花水月』番外編

正直、告げられた時は目の前が真っ暗になったんだ――――。

それを知ったのは、やたら深刻な顔をしたルキアが窓から入り込んできた時だった。

試験も近かった一護は、机に向かって一心に数式を解いていた。今までずっと死神業に勤(イソ)しんでいたせいか、授業を抜けることも多々あり、正直急がないと間に合わない。

時折、悩むように頭を書いてはシャーペンを走らせていた。

「xが移項するんだからyは…」

一護は教科書を呼んで解き方を確認すると、「あー」と納得したように回答を書きこんだ。

「こりゃ、マジでやべーな…」

はぁ、と大きくため息をついた時だった。ガラリと勢いよく窓が開く。

「うおぉう!?」

考えに耽っていた一護は、静かな空間に響いた音に身を震わせた。
その際に落としたシャーペンの芯が、小さな音を立てて折れた。

「ルキア！？」

窓に足をかけて姿を現したのは、もはや見慣れた小柄な少女。ただ、
普段は義骸を着てくるというのに、珍しくも死霸装のままである。

「……」

「お前、どうしたんだよ急に。叛乱の後片付けがあるからしばらく
こっちには来れないんじゃなかったか？」

「……」

「ルキア？」

「……」

未だ、窓に足をかけたまま動こうとも喋ろうともしないルキアに、
さすがに不安になった一護は口を閉ざした。

普段は鬱陶しいだけのコンがいたらと思ったが、先ほど勉強の邪魔
だと外へ投げ飛ばしてしまっている。

しかし、ただこうしているだけでは埒が明かない。一護が「おい」

と声をかけようとしたところでそれを遮るかのように、それまで黙っていたルキアが口を開いた。

「一護」

「……何だよ」

「すまない…」

「あ？」

いきなり謝罪の言葉を口にされ、一護は驚いたように目を丸くした。

「何だよ、急に。変なものでも食ったか？」

「……」

一護は居心地悪そうに視線をさ迷わせた。普段の彼女なら、そこで「たわけ！」とでも言って反論してくるだろう。それが、今はやたらと神妙そうな顔で俯き黙っている。

「おい」

「…何だ」

「何かあったのか？」

「……」

「虚でも出たか？」

「…違う」

「じゃあ、また何か事件でも起こったとか？」

「いや…」

「白哉と喧嘩でもしたか？」

「違う。何故、そこで兄様が出てくるのだッ」

そこで大きく反応を見せたルキアに、一護は「分かんねーのかよ…」と呟いた。ルキアにはブラコンという自覚がないらしい。

だが、それきりでルキアはまた黙りこんでしまった。一護がはぁ、とため息をつけば大げさに身を固くする。それが、一護の堪忍袋の緒を切ってしまうことになった。

「あーッ、ったく！何だってんだ！怒らねーからはっきり言え！」

我慢できずにそう言えば、ルキアはさらに顔を俯けてしまった。

（やべッ、言い過ぎたか！？）

その様子にさすがの一護もおろおろとしてしまうが、ふと視界に入ったルキアの拳が、何かを堪えるように強く握りしめられていることに気がついた。さらに見れば、肩もまるで泣いているかのように震えているではないか。

「ルキア…？」

ルキアは、まるでその呼びかけに答えるかのように、少し間を置いてようやく一言漏らした。

「すまぬ…ッ」

「……」

「すまぬッ、一護…ッ」

顔をあげたルキアに、一護は大きく目を見開いた。涙は流れていない。それなのに、その表情はまるで泣いているかのように歪んでいた。

処刑される時すら泣かなかったルキアのその表情に、一護は戸惑うばかりで何も言えない。その間に、ルキアはとうとう口にした。

「私は、貴様の記憶を消さねばならぬのだ…」

ゆっくりと琥珀の瞳が開いていくのが分かった。それが見ていられなくて、何を言われるのか怖くてルキアは目をそむける。

しばらく経って、一護はルキアの予想を大きく反する言葉を口にした。

「そうか…」

ギュッと目を瞑る。しかし、その一言から何も聞こえてこないことに、ルキアが背けていた顔を戻すと、今度はルキアが目を見張った。その表情は憤りでも悲しみでもなく、現実を受け入れているような優しい表情だったのだ。

「それ、だけか…？」

「…何がだ？」

意味が分からないと首をかしげる一護に、八当たりと分かっていて声を荒げた。

「何がだ？ではないであろう！もっと、言うことはないのか！？」

意味不明だと自分でも思った。怒鳴られるのが、嫌われるのが怖かったくせに、言われなければ言われないで自分が声を荒げている。

「何も言うことなんかねーよ。もう、決まったことなんだろ？」

「そうだ…、そうだが、しかし！」

「じゃあ、嫌だって言ったって仕方ねーじゃねーか」

あっさりと言う一護に、もはやルキアは我慢がならなかった。

「馬鹿者！」

もっと、怒ればいい。

「何故、貴様は怒らぬのだ！」

幾度となく助けてもらっておいて、必要としなくなった途端捨てるかのように記憶を消すという我ら死神に。

「我々死神は、身勝手に貴様の記憶を消すと言っておるのだぞ！」

いや、違う。

「そんな…ッ、そんなにあっさりと受け入れて良いわけがないではないかッ！」

一護のためではない。

「怒れ！責めろ！罵倒しろ！」

自分が苦しいのだ――。

「一護！」

そう一息に言って肩で息をするルキアに一護は目を瞬いて、そしてやはり笑った。

「怒れるわけ、ねーじゃねぇか」

「何を…ッ」

「だって――」

言い募ろうとするルキアの言葉を遮って、一護は彼女の顔を指差してからかうように言う。

「そんな顔してる奴を責める程、俺は薄情な奴じゃねぇ」

その指摘に、ルキアは両手の平を顔へ張り付けた。ペタペタと触って確かめるが、生憎と分からない。それを可笑しそうに笑う一護に、ルキアはわずかに頬を染めて睨みつけた。

「一護、貴様…ッ」

「それに――」

また一護はルキアの台詞を遮った。二回目のそれにルキアは不満を覚えるが、その目がいつも見てきた強い光を湛えていて思わず口を閉じる。

「悲しくはないしな」

一護は言った。

「前にも言ったろ。離れてたって、魂はお前らを忘れない。仲間との絆ってのは、そう簡単なことじゃ断ち切れやしねーよ」

覚えている。ルキアは思い出すように目を細めた。あの時、一護は己を忘れはしなかった。そして、決して他の仲間も己を忘れてはいなかった。魂にしっかりと刻まれた絆が、事件を解決に導いたのだ。

「分かったろ？だからさ、別にこれが最後の別れってわけじゃねぇ。お前が自分を責める必要なんてねーんだ」

だからさ、と一護は促した。それにルキアはおずおずと右人差し指を持ち上げ、一護の額へと持っていく。

「なぁ、ルキア」

額に触れようとしたルキアの指が、寸前で動きを止めた。悲痛な表情のまま、目線だけを一護の瞳に向ける。

「俺はさ、お前らを忘れねぇ。だから――」

そこで、一護は初めて悲しげな笑みを浮かべた。

「だからさ、待っててくれよな。死神になって、会いにいくからよ」

ルキアはギュッと強く目を瞑る。そして、目を開けたときには挑戦的な笑みを浮かべて、震える声を精一杯堪えて言った。

「当たり前だ」

そうすれば、一護は笑みを浮かべる。そして、指が額に触れる寸前だった。ルキアの耳に届いてしまった、彼の弱音。

ベッドへと倒れた一護を見て、ルキアは頬を伝うものに気がつかない振りをして顔を俯けた。

「馬鹿者…ッ。お前は本当に大馬鹿者だ…ッ」

でも、やっぱり寂しいもんは寂しいな――――。

「そんなことを聞いてっ、私はどうすれば良いと言うのだ…っ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9227s/

死後の約束

2011年5月2日10時28分発行